



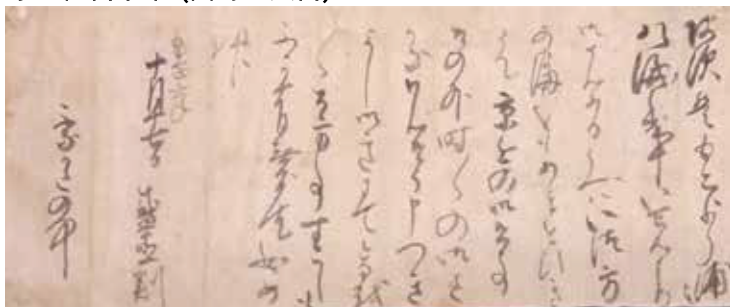
泡一つより生まれきし ～対馬の営みを後世に伝える～

広大な面積の対馬では、地域ごとに独自の文化が存在しています。厳原町曲地区には、海を自由に潜りアワビやサザエを採る「曲海女」と呼ばれる人たちが暮らしていました。かつて海女として生計を立ててきた人や、その家族、その文化に触れ伝えようと活動する人たちにお話を伺いました。

鎌倉時代に筑前から対馬に来た 海士集団がルーツ

鎌倉時代、筑前鐘ヶ崎（現在の福岡県宗像市）からやってきた海士集団は、対馬を治めていた宗家から対馬各地で漁業を行うことを許され、漁業を行いながら海の上で生活していました。曲地区は、この海士たちが、時代の変化に合わせ、江戸時代の中頃に定住したことでできた地区とされています。

宗盛直書下案（曲海士文書）



守護代宗盛直が、対馬全域の海で網を引き、魚を上納するよう伝えている。曲の漁民には、これ以前より島内の浦々で網引きをする権利が与えられていた
曲地区蔵（長崎県歴史研究センター寄託）



からだ一つで自然と向き合う曲海女
(写真：文化財課)

江戸時代に海女が登場

海に潜って漁を行うことに長けた海士たちは、鯨漁などで活躍しますが、男性が漁や藩の命令によって地区を留守にすることが増えると、女性が海に潜り貝を採る漁を担うようになります。曲の海女たちは、対馬全島を船で移動しながら浦々で漁を行いました。海女船と呼ばれる船で移動しながら、1年のほとんどを過ごす曲海女の姿は、70年ほど前まで見られましたが、法律が改正され、自由に漁ができなくなった昭和26年を境に減り始め、現在、曲地区では仕事として潜る「海女」は1人もいません。

海女の生活はどのようなものだったのでしょうか。10代から海女として漁を行っていた香月ツルエさん、梅野桂子さん、梅野貞子さん(1列目左から)、家族が海女や漁に関わっていた梅野英樹さん、梅野菊次さん、梅野利光さん(2列目左から)に当時のお話を伺いました。

何歳から海女さんとして仕事をしていたんですか？

梅野桂子さん 母も海女だったし、私も子どもの頃からずっと潜ってきて、海女になるのは当たり前前のことだと思って、10年ちょっと前、80歳まで海女を続けてきました。



香月ツルエさん 私も、親に連れられて海で練習して、13歳から海女として働きました。結婚後、妊娠中も潜って仕事をしていたので、次男は西側の小茂田で生まれました。

海女さんのお仕事について教えてください

梅野貞子さん 海女船には、船頭夫婦と海女が3人くらい乗り込んで、対馬の浦々に出かけて漁をします。二十日正月を過ぎると船に乗り込み出発し、曲に帰るのは盆前、盆を過ぎたら正月までは一度帰るだけという生活を繰り返していました。海に入って船に戻るまでを「一入(ひとしお)」というのですが、夏は日に6回、冬は4回繰り返します。船で火を焚いて温まりながら海に潜ります。出かけた浦々では、



民家にお風呂を借りに行くのですが、サザエを手土産にすると大変喜ばれました。水揚げの2割を船頭さんに渡す、船での食料や日用品は、均等に負担するなどのルールがありました。

海女さんとの思い出や、地区の人達にとっての海女さんはどんな存在だったか教えてください

梅野利光さん 香月さんはおばさんですし、祖父母が海女船の船頭でした。幼い頃は、祖父母に連れられて海女船に乗っていました。豊(上対馬町)あたりまで行ったと思います。船の上では海女さんたちの潜っている時間を計ったりして遊んでいました。

梅野英樹さん 母親が海女でした。小学校3年生くらいまで、ふんどし姿に水中眼鏡の海女さんがいる風景があたりまえでした。まさか、対馬の中でも曲だけにしか海女がいないとは思いませんでした。

梅野菊次さん 祖母が海女、母はよく海女さんの家に子守りに行っていました。地区にある山住神社には、明治時代に石塔を建てた際に寄進した人の名前が彫ってあって、女性の名前が多くあります。その時代には珍しく、女性が寄進するということは、海女さんが地域の経済を担っていたということだと思います。曲の女の人は働き者が多いんですね。

自然と対峙する大変なお仕事ですが、振り返っていかがでしたか？



梅野桂子さん 大変なことはあったけれど、大漁だったときは素直にうれしいし、一生海女でいることができて幸せだったと思います。

香月ツルエさん 海の中は自由を感じる場所でした。最近、陸だと腰が痛かったりするけど、海に潜ると動けるので、仕事を辞めても時折海に潜っていました。今はドクターストップで潜れないけれど、元気になったらまた海に行きたいです。

若い頃に戻ったら、どんな人生を歩みたいですか？

3人) もちろん海女をやります。



山住神社の石板に刻まれた海女たちの名前

曲の海女がいた営みを 残し、伝える

生業としての海女がいなくなった現在、曲地区では、当時の道具を保存し、展示したり、海女船を再現した模型を作るなど、伝えたり残したりする取り組みを行っています。その思いは、地域を越えて広がろうとしています。

福岡出身の美術作家、山内^{てるえ}光枝さんは、10年ほど前に海女たちが裸で海にたたずむ写真を見て、衝撃を受けました。裸で自然と対峙する姿は、現在の価値観では計ることができないと感じたからです。元々、社会の既存の価値観の中で判断することに疑問を抱きながら育ち、価値観や人々の想像を超えて表現するアートの世界に魅力を感じて美術作家となった山内さんは、今を生きる人たちとは違う目線に立つことで見える世界観を表現してきました。

海女がいた世界観を多くの人に知ってもらいたい

山内さんは、地元福岡の鐘崎をはじめ、沿岸の漁業集落に滞在して、海女との交流を始めました。2013年には、海女が潜る姿を映像に記録したいと、韓国済州島に渡り、海女学校で素潜りの水中撮影を体得します。各地に滞在し、創作活動を続けてきた山内さんは、曲地区で多くの時間を過ごし、地域の人たちとのふれあいの中から見えた世界を作品に込め続けています。

香月さんとの旅の記録が多くの人の心に届く

曲地区に通うようになって8年ほどが経ったとき、香月ツルエさんとともに、福岡県宗像市鐘崎へ向かいます。

香月さんが曲海女の源流である鐘崎だった場所を訪ねたいと考えていたのをきっかけに実現した旅は、山内さんの手によって撮影、編集され、映画として多くの人たちの心に届く作品となりました。



映画「つれ潮」の一場面



香月さんとともに福岡へ



細部まで復元された模型



船上生活を人形で再現



展示されている当時の道具



やまうち ^{てるえ}
山内 光枝さん

1982年福岡県生まれ 福岡県在住、同地を拠点に活動

2006年、ロンドン大学ゴールドスミス校BAファインアート(イギリス)を卒業。

2013年には済州ハンス プル海女学校(韓国・済州島)を卒業、素潜りでの水中撮影を体得する。

2015年に文化庁新進芸術家海外研修制度、2016年には国際交流基金アジアフェローシップの支援を受けてフィールドを海洋アジアへと広げる。

「東京ドキュメンタリー映画祭2019」で、玄界灘を舞台とした初の長編映像作品『つれ潮』(本展出品作)が奨励賞受賞。最近の主な展覧会に「水のアジア」(福岡アジア美術館、2023年)、「日本バビリオン」(光州ビエンナーレ・韓国、今年9月開催予定)がある。

海女をテーマに作品を作る理由

7月13日から対馬博物館で開催される「泡ひとつよりうまれきし 山内光枝展」は、山内さんが10年以上にわたって、曲地区や海女文化について感じたことを形にした企画展です。海女の世界を感じてもらうため、展示では、山内さん自身の作品だけでなく、民俗写真家の芳賀日出男さんが残した写真、曲地区の人たちが残した道具や海女船の模型なども展示され、海女という文化を伝えたいという山内さんの思いが詰まった企画展となっています。

海女や対馬と出会って10年以上が経つ今、山内さんが海女をテーマに作品を作り続ける理由について、こう話します。

「日々の暮らしの中で少しずつ変化していくことは、私たち人間が生き続けていることなんだと思います。

同時に人類は、伝えたり、記録として残すことをやめることもありませんでした。自然と対峙する海女は、人間の文化そのものだと思います。曲の人たちが使わなくなった道具を残したり、手間をかけて当時の船の模型を再現したりしているのも、人間の文化に魅了された人たちの表現だと思います。今回の企画展は、私が10年以上通った中で見えたものをまとめた、ラブレターのような存在だと思っています。私だけでなく、対馬の人や風土の中でともに育んできた作品たちを見ていただき、皆さんご自身の思いを感じてもらえたらと思います。」



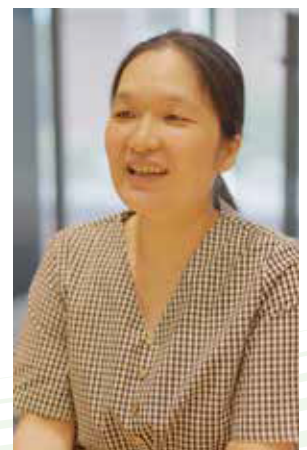
企画展の魅力を学芸員に聞きました

今回の企画展を一言でいえば「海女の呼吸を感じる展覧会」だと思っています。現在、曲地区では、仕事として海に潜る海女はおらず、人々の記憶の中の存在となってしまいました。今回山内さんが作り上げた展示室の空間に置かれた作品や資料は、海女がいた対馬の風景と、現代を生きる私たちをリアルにつないでくれる存在です。また、映像や写真、作品の一部に触れることができるので、体全体の

感覚で対馬の海女文化や人と自然との関わりについて知ることができると思います。

山内さんは、自らが触れた海女の営みや記憶を自らの体を媒介にして伝えるべく、素潜り撮影を体得されたり、長い時間をかけて、海女やその家族が暮らす地域に寄り添っています。だからこそ、作品を観る人たちが、海女の呼吸を感じるという、日々生活するだけでは感じることもない感覚を得ることができるのだと思うのです。

言葉では言い表すことのできない海女とその家族とのつながり、そして、山内さんの思いが詰まった企画展にどうぞ足を運んで、皆さんの体の記憶のひとつとして、自然の中に身ひとつで生きた海女の姿を残していただけたらと思います。



対馬博物館
小栗栖 まり子学芸員

泡ひとつよりうまれきし 山内光枝展

期 間：9月23日（月・休）まで（木曜日休館）

観覧料：一般・大学生300円（市民は190円）高校生以下無料

9月中旬にはトークイベントを開催予定です。詳しくは博物館ホームページをご覧ください。

